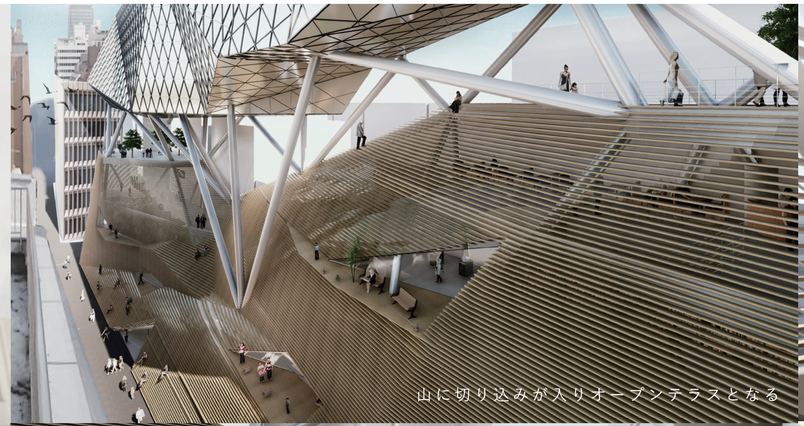
銀座山脈



山に切り込みが入りオープンテラスとなる

ルーバーから木漏れ日が差し込む

ファサードには人々のアクティビティが表れる

山頂広場からは銀座の街が一望できる

山を登った先にあるレストラン。まちの人々や観光客が集う、にぎやかでオープンな空間。

視線の抜けた上層部の落ち着いた空間で本を閲覧できる空間。

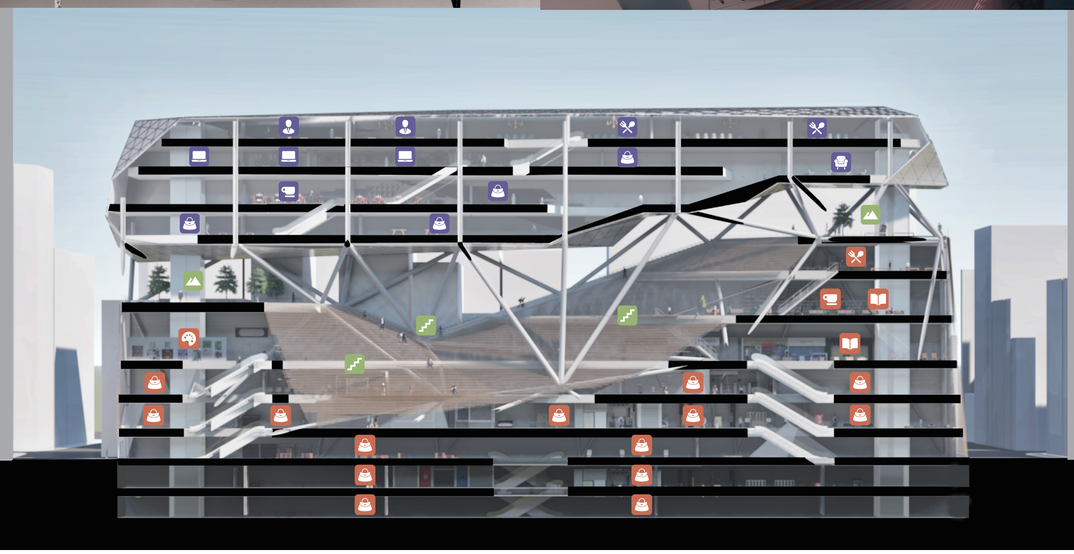
地域のイベントや地元の芸術家による展覧会が定期的に開催され、銀座のまちを訪れた人がだれでも気軽に入ることができる場所。

屋外にそのまま出ることができるテラスをもち山の休憩所となるようなカフェ。

山道から店内の様子が垣間見え、気軽に立ち寄ることのできるショップ。

山頂広場。銀座周辺の街並みを一望できる。

頂を目指す山道。道中では垣間見える内部の様子により様々なアクティビティが誘発される。



巨大なストラクチャーにより宙に持ち上げられた空間。銀座の街並みを一望できる上質な食事を楽しめるレストラン。

山からのアプローチを避け、エレベーターによる垂直動線のみでつながる。地上からは浮遊した存在の空間は都会の喧騒から離れた静寂でプライベートな空間。

よりプライベートな買い物を楽しむことができるショッピング空間。

賃貸料の高いオフィスを配すことで、使用する企業が限定され、一定以上の顧客の質が保たれる。

プライベート利用の顧客に対応する空間。コンシェルジュなど専属のスタッフが接客を行う。

非日常なしつらえによる空間により、上質な時間を提供する。

01.銀座×山

□歩くまち銀座

銀座は、ショーウィンドウや歩行者天国など、歩くことを主とするワードに関連図けられるように、「歩く」ことによる体験型の消費行動が今なお根付いているエリアである。それは多様な意味を持つ銀ブラから、明治時代以前の路地が張り巡らせた街路といった歴史的文脈からも見て取れる。銀座は、歩くことが行為の主体であり、歩くことによりを楽しむことができるまちである。

□資本主義原理の山

都市に蔓延する資本主義原理に基づく階層的な建築群は、銀座において特に顕著であり、それを隠ぺいするかの如く建物は固く閉じられ、ますます排他的様相を増している。こうした都市の現状に、盲目的になるのではなく、むしろオープンになるべきであると私たちは考える。それは資本主義社会に生きる我々の象徴であり、銀座という日本一の商業都市にふさわしいものになるだろう。

□銀座の山

歩くまち銀座と資本主義都市の頂点である銀座において、これからの銀座を担う新たなシンボルとなる建築を提案する。資本主義原理に裏付けされる都市のヒエラルキー形態である山の形は、銀座のまちを立体的に展開し、従来の歩く行為の幅を広げる。それは銀座のまちにそびえる巨大な山であり、歩くまち銀座の象徴となるだろう。

02.建築としての山

歩くまち銀座の界隈性、賑わいを建物に引き込む。山型ボリュームにおいて歩行空間は多様であり、地上部のフラットな面とは異なる空間が生まれる。また、人々が歩く様子はアクティビティ化され、人々を引き込む吸引力を持ったファサードとなる。

fig.1

細長い敷地の双方から人々を引き込むような自然な流れを形成することで完結していた通りでの活動が建築までオーバーラップする。

fig.2

山に対しての大きな屋根として、また容積確保のためのボリュームを設ける。敷地裏側の採光と通風が生まれ、長手軸の道路に光を落とす。

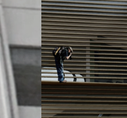


fig.3

コアやブレースにより２つのボリュームをつなぎ、構造と動線が一体となる。山を登るような感覚を抱きながら上へと導かれる。

□動線

03.環境装置としての山

□光と風の通り道

山型と浮遊する雲のようなボリュームにより生まれた隙間から光が注ぎ、風が山間を通り抜けることで都市に対しての冷却効果を生む。

□熱流体解析

サーモグラフィーによって熱流体解析、自然換気性能をシミュレーションし、傾斜の角度や多面体などの検討を行った。

04.おおらかな雲

□まちを纏う多面体

山の上の多面体のボリュームは雲のように浮遊し、空や銀座の街の風景を写し込み、通りの賑わいを纏います。

□経済を回すボリューム

限定層のために会員制のショップやレストラン、オフィスが設けられる。銀座の街が一望でき、都市の喧騒から離れた上部がこの建物の経済を回す。

05.山と雲を支える構造と素材

□構造

雲内部の床を支える列柱
複雑に見えるトラス構造は終点で等間隔のスパンのラーメン構造と合流する

雲ボリュームを支えるトラス構造
山間に巨大なピロティ空間を生み出す。

山を支える巨大な複合トラス構造
空間に力強さを与え、人々を包み込む。

□素材

連続するルーバーは、夏の強い日差しを遮り、強い日差しが建物内部に侵入するのを防ぐ役割をもつ。また、透過率を 75% に設定し、内外の視覚的つながりを生む。山を登る過程やテラスを歩く体験は、同時に内部が垣間見え、内部へと人々を引き込む。

06.銀座を体現する山と雲

歩くまち銀座

山道を進むに連れ移り変わる風景は銀ブラでの奥へと奥へと展開していくような歩行体験。

透過性の高いファサードでは内部の様子が垣間見え、立体的に展開するショーウィンドウのようである。

山道を歩く人と内部を歩く人の視線は互いに様々な点で混じり合い、見る見られるの関係が複雑に展開する。

通りから見た山は人々が山道に集い各々が異なった行為をしている、歩行者天国が立体的に伸びたような形態。

透過性の高いファサードでは内部の様子が垣間見え、空間が立体的に展開するショーウィンドウのようなファサード。

階段が時にテラスとなりファサードに現れる。人々がノンスケールのファサードに点々と現れる様子は銀座のショーウィンドウのようである。

資本主義原理の山

人々が歩いて登れるレベルの上に存在する雲のようなボリュームは資本主義社会の階層的構成を象徴しており、銀座の社会構造そのものである。

雲ボリュームはファサードをミラーガラスで覆っており、外部からは知りえないブラックボックスとなっている。

通りから見た山は人々が山道に集い各々が異なった行為をしている、歩行者天国が立体的に伸びたような形態。

山と雲の間にできる領域は銀座における階層間の心理的隔たりを具現化したようである。

山と雲は明快に互いの性格に違いを表しており、如実にヒエラルキーが表れる。

hlc-196